
比翼連理

緋色 志輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

比翼連理

【Nコード】

N3140BA

【作者名】

緋色 志輝

【あらすじ】

「今日もイチャついていて目のやり場に困りますね」といついつい
呟いてしまった事によってとんでもなく、厄介な方と行動を共にす
ること

私、なんだか無性に引きこもりたいです。

序

落ち着かなげに女性が馬車の中でため息を漏らす。

「どんな方なんでしょうね。やはり噂されるように非道な方なのかしら？」

私、これから花嫁になれるかしら？」

不安げに潤む瞳は同性でもさえも思わずクラツと来てしまつくらい儂げで可憐である。

「セシル様、落ち着いて下さいませ。何も心配することはありませんわ」

静かに寄り添いながら控え目に少女が向かい側からたしなめる。それに落ち着いたのかセシルと呼ばれた女性は少女を見る。

「でもね、あの方は私より四つも歳上でいらつしやるしもしかしたら女性の方々がいらつしやるかもしれないわ」

沈んだ表情のセシルの手を取り、少女は安心させるように笑う。

「セシル様はこれから王妃として嫁ぐのです。ならば堂々と下さいませ」

劣るような眼差しにセシルが笑う。

「これでは私の方が子どものような。貴女は私より年下なのに」

「年下とは言っても一つ違いなだけです。」

「どう見ても成人した女性に見えないよね、ミーシャは」

少女、ミーシャは落ち込んだように視線を馬車の外にやる。

窓に映る姿はどう見ても15〜6歳の少女

18歳で成人なのがこの大陸の常識で、既に二年前に成人したミーシャにとって自分のこの姿はコンプレックスだ。

「ブロッサム城が見えてまいりました。」

外からの声にミーシャとセシルは顔を見合わせる。

そしてゆっくりと深呼吸し、気を引き締めるとミーシャはセシルのドレスや髪などを直して準備を整える。

「準備はどうかしら？」

「完璧です。」

セシル様ほどお綺麗な方はおりません」

賛辞の言葉に頬を染めて頷き、セシルは高鳴る胸を押さえる。

ミーシャは伏し目がちに俯き、その時を待ち構える。

そう、だから知らなかった。

この時、いやこの結婚話が持ち上がった段階で大きな陰謀が張り巡

らされ

幾重にも巻かれほどけない糸に自ら飛び込んで行っていたことに

なおかつ、ありえない王の一言によって引き起こされる騒動を

そして同時に不幸としか言えないミーシャの災難が幕を開けたことに

まだ二人は知らず、幸せな日々が始まるのだと信じていた。

一話

華やかな室内には幾人もの侍女が傅き、寄り添ってソファアに座る男女を見つめている。

とても絵になる二人であった。

「もうユーリったら恥ずかしいわ」

「セシル？なぜ恥ずかしがる必要がある。」

「だってみんな見ているわ」

頬をうつすらと染め、周りにいる侍女を見て俯く。

するとユーリと呼ばれた青年がセシルを顎を軽く掬い、輝くばかりの笑顔で顔を近付ける。

「見せとけば良い。そんなことより私をもっと見る」

「ユーリ」

潤んだ瞳でセシルがユーリを見つめると同時に二人に最も近くに控えていた侍女が静かに一礼する。

と同時に他の侍女も習うように一礼し、音も立てずに部屋を出ていく。

扉が閉じた瞬間、静かに行動していた侍女達が顔を見合わせてため息を漏らす。

「陛下は本当に王妃様が大好きなんですのね」

「お暇を見つけてはいらっしゃいますもの」

「1年前までの陛下でしたらありえないことですわね」

口々に感嘆の声を上げている侍女たちに最後に出て来た侍女が手を軽く鳴らす。

「おしゃべりは後にして、それぞれ仕事に取り掛かって」

優しい促しに皆少し残念そうにしながらそれぞれの持ち場に散って行った。

それを見届け残った侍女、セシル付きの侍女長ミーシャは真向かいにあるセシルの部屋に戻る。

今の内にセシル様が夜に行かれるパーティー用のドレスを出しておかなければ
それと薔薇を取りに行つて来よう。
色はドレスに合わせて大輪の薄紅の薔薇を

衣装部屋から丁寧な手つきでドレスを取りだし、皺にならないように掛けておく。
そして部屋にちょうどやって来た小柄な侍女にお風呂の準備を頼み、庭園へと急ぐ。

セシルが身に着けるすべての物を吟味し、選ぶことを一任されているため

一応専任の下級侍女がいるがミーシャはセシルの髪を飾る薔薇を自

ら行つて選んでいた。

お陰で上級侍女、しかも王妃付き侍女長であるにも関わらずミーシヤは庭園の庭師と親しくしている。

元々侍女長はこのアガルティ帝国が用意しており、セシルと共に母国クリーガナから来たミーシヤを含めた侍女達はその下で働く事になつていた。

だがある事でその侍女長は身を退き、セシルを溺愛する皇帝がセシルの願いを叶えて
ミーシヤは若干20歳で大国の王妃付き侍女長になつたのだつた。

「誰か連れて来るべきだつたかしら」

たどり着いた庭園で条件に合う薔薇を切り、丁寧に棘を抜きながら辺りを見回す。

ミーシヤの趣味の一つにローズオイルと薔薇水を作ると言う物がある。

このローズオイルも薔薇水もセシルの大のお気に入りです。つい最近、新しい物を作るように頼まれていた。

「セシル様も困つたお方だわ。」

陛下と一緒に使われたら無くなるのが早くなるのも当たり前ですのに」

ため息をつきながらも棘を抜く。

「仕方ありませんから」

後でアンドレに頼んで持って来てもらうしかありませんね」

アンドレとはミーシャが厚意にする庭師である。

そのアンドレは近くで薔薇の手入れをしていた。

持って来ていた籠に棘を抜いた薔薇を入れて大事に抱えてからアンドレに近付いていく。

「アンドレ、忙しいところ申し訳ないのですが」

声を掛けるとアンドレはその温かい笑顔で向かえてくれた。

無理なお願いとも思える頼みにアンドレは快諾し、明日中に届けてくれると返事を貰えた。

「それではよろしくお願いいたしますね」

「ミーシャ様もお気をつけてお帰りを」

ここは皇宮の奥まった皇帝とその家族が住む場所で

皇帝が認めた者以外は入れないのですれ違つとするなら同じ使用人ばかりなのだ。

危険があるとすれば少しドジなミーシャが転んだりして怪我をするくらいだ。

「あとは、陛下からセシル様を引き離すだけね

陛下は一度セシル様を独占されたらいつまでも離してくださらないから

まあ、それはあの二人に任せたら大丈夫よね。」

忘れている事がないか確かめながらミーシャは足早に歩く。

「今日は内輪と言え、セシル様と陛下の結婚記念パーティーですものね

気合いを入れてセシルを綺麗に送り出さなければ」

優しく笑みミーシャはセシルの部屋に急いで帰って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3140ba/>

比翼連理

2012年1月13日02時51分発行